

2020年2月4日

近代日本発展の基礎を伝えよう① 安岡正篤が説いた歴史と古典重視の人材育成

主席研究員 佐伯浩明

◆歴史と古典の意義を説いた安岡正篤先生

大正から昭和にかけて活躍した安岡正篤先生は、戦後の連合軍最高司令部（GHQ）のブラックパージの荒波を乗り越えて活躍した在野の東洋学、とくに陽明学の泰斗だ。先生の素晴らしい業績は、都心の池袋から東武東上線に乗って武蔵野台地から山間部にさしかかる武蔵嵐山駅に降り立って、徒歩20分のところにある埼玉県比企郡嵐山町菅谷の「財団法人郷学研修所・安岡正篤記念館」を尋ねれば、その全貌がわかる。

町名の由来となった嵐山溪谷は、周囲を流れる都幾川（ときかわ）の支流・槻川（つきかわ）の蛇行部に広がる景勝地で「武蔵嵐山」と称されている。日本の「公園の父」と呼ばれた埼玉出身の造園家・本多静六が、1928年（昭和3年）にこの地を訪れた際、その風景の美しさを京都の嵐山（あらしやま）に例えて命名したことに由来している。

また、嵐山町周辺は、平安時代から戦国時代にかけて多くの争いの舞台となった。平安時代末期には、源頼朝の兄義平が叔父の源義賢を攻め滅ぼした「大蔵合戦」があり、戦国時代には関東管領上杉氏の内紛の舞台ともなり、後に北条氏が進出した。幾多の城砦が構えられた。今や城や館は無いが、貴重な遺構を残した4つの城址があり、2007年（平成19年）に「比企城館跡群（ひきじょうかんあとぐん）」として国の史跡に指定された。その中の3つの城址が、嵐山町内に所在し、「史跡公園」として整備されているところもある。

こうした美しい自然環境と故事に魅かれて、安岡先生は戦前の1935年（昭和6年）、広大な農地を有する「日本農士学校」を埼玉県菅谷の地に、すなわち現比企郡嵐山町に開校され、東洋哲学に基づく農村青年の教育を行った。都市文明を離れ、大地に足を着けて東洋の古典・哲学を学び、己を修めて国家社会に真に役立つ人材の育成を目指した。同年は満州事変勃発の年だが、安岡先生は「日本の精神的復興は、浮薄な都市文明に汚されていない農村の精神復興から成る」という信念の実践の場として同校を興された。

しかし、その精魂を傾けて創建した「日本農士学校」も、敗戦によるGHQの「日本の伝統的なものはすべて破壊する」占領政策によって廃校を余儀なくされた。だが、戦後混乱期が落ち着いた昭和45年、広大な所有地を手放して残るわずかな一角に、「郷里の先賢に学び、風土に培われた学問を振興して信念と教養を持つ人材を育てよう」と、想を改めて創設したのが「郷学研修所」である。道を求める人や有縁の人材に、先哲の教えを伝えて再び人材の育成に乗り出し

たのである。また、政財界リーダーの啓発・教化・指導にも当たり、先生は昭和の時代を通じ「天下の木鐸」と仰がれた。また「安岡正篤記念館」は、安岡先生の死去後、先生の聲咳に接した政財界、教育界など各界の支援により平成3年（1991年）に同地に開設された。



(在りし日の安岡正篤先生)

◆終戦の詔勅を实践し苦難を乗り越えた昭和の日本人

展示・販売されている先生の著作は、どれ一つとっても含蓄の深い歴史と古典から導き出される省察に溢れていて、四半世紀を過ぎた現代においても光芒を放っている。また、先生自身は、戦後「歴代総理の指南番」ともいわれ、「耐え難きを耐え、忍び難きを忍び」の一文で象徴される昭和天皇が国民に告げられた「終戦の詔勅」に朱を入れた事でも知られている。

日本が先の大戦、いわゆる太平洋戦争（大東亜戦争）に敗れ、軍人・民間合わせて約310万人の犠牲者を出しながらも、戦後の経済復興を立派に成し遂げGNP世界2位になるまで歩んできた苦難の道は、60代から80代の人々は誰もが知るところだが、「耐え難き…」の一文は、来る艱難辛苦を予想した次の言葉からなるフレーズだ。

「思うに、今後帝国の受くべき受難はもとより尋常にあらず、汝臣民の衷情も朕（私）よくこれを知る、然れども朕は時運の赴くところ、耐え難きを耐え、忍び難きを忍び、もって万世の為に太平を開かんと欲す」

現代的な言葉に直せば、「今後の日本の行く末を思うと、日本が受ける苦難の数々は並大抵ではないだろう。私（昭和天皇）もこのことを熟知している。しかし、私は、これからの時世の行く先々は、一にも二にも耐え難きところを耐え、忍び難いところを忍んで乗り越え、もって後世の人々のために、国民と共に明るい未来を開いていきたいと切に欲している」という意味だ。

日本国民は、この詔勅、この言葉の通りに実践し、見事に苦難を乗り越えた。高度成長期が終わり、今や世界第3位の経済大国とは言え、平成・令和の日本は一転して著しい人口縮小時代に突入している。この経験したことのない困難を克服するためには、今一度、この言葉の重さを、各々が深く心に問うべきだろう。そのためにはGHQが発した独立国としての要件を欠く「戦力の不保持」、「道徳の廃止」など無理解な憲法草案作りや指令の数々が、日本の針路をいかに歪め、いかに日本人としての活力を削いだかは知る人ぞ知るところだ。それもまた考察を必要とし、今を生きる人々が今一度、進んで自問自答しなければならないことである。

◆海外留学生に日本の歩んだ苦難と克服の道も伝えよう

こうした前提を踏まえながら、戦後70年余を経た日本は、海外留学生は30万人に達し海外の若者が多数来日している。とくに法務省告示校としての日本語学校に学ぶ語学留学生は、2018年には9万人を超え海外留学生の3分の1にまで拡大している。彼らに日本語を教える同告示校としての日本語教育機関は、約780校にものぼり、単に数だけ比較するならば、大学数を超えているのが現状なのだ。しかし、学校の質はまだまだ比較にならない。改善改良の余地は数々ある。

ただ、留学生や先生方に述べたいのは、せっかくの縁を無駄にしないで、日本の歴史と古典に学んで欲しい。日本語の上達は当然のことながら、諸君が大志を抱いて来日したからには、日本語の習得以外に、何故、日本が明治維新の近代化を成功させたか。敗戦の悲劇を乗り越え、経済復興を成し遂げ、最近では、東日本大震災のような大災害も乗り越えて前進することができたのか。

また、シンガポールのシンクタンク「東南アジア研究所」(ISEAS)が今年行ったASEAN加盟10カ国の政府関係者や学識経験者、非政府組織(NGO)関係者ら1308人を対象にした「ASEAN有識者調査」によると、「戦略的パートナーにしたい国」として日本が中国を抑えて最多の結果を示した。何故こうした事が可能になったのか、その「if」を学んで欲しい、あるいは伝えて欲しいのである。

粒粒辛苦の道を歩んできた日本が、敗戦の破産状態からGDP世界2位に達するまで素晴らしい成長を遂げることができたのは何故か。中国の台頭によって世界3位に後退したとはいえ、この発展ぶりは、どこから生まれてきたのか。それだけではない。明治維新までは、まったく名もあまり知られていないアジアの小国・日本が、短時間で近代国家建設を成し遂げ、日清・日露の両大戦に勝利し、当時の世界の5大国まで成長できた原因は何か。

学生諸君には、勉強とアルバイトにいそしむ合間に、その七転び八起きの日本の原動力はどこにあるのかを学んで欲しいのである。先生方にも、授業の合間にそうした知識、智恵を学生に授けて欲しいものである。

◆道徳、徳育、倫理の重要性も解いた安岡学

その重要なヒントを与えてくれるのが、実は安岡正篤先生の教えなのである。先生は古今東西の本を読破され、万里を旅して、活学を实践されたが、中国・日本など東洋の古典についての知識は特に人並み外れていた。その安岡先生が、

いつも口癖のように説いていたのが、実は「歴史と古典に学ぶ重要性」だった。

GHQは何故、日本農士学校を閉鎖に追い込んだのか。あえて言えば、その立派さを恐れたのではないだろうか。GHQは、安岡先生自身も「戦犯」として、東京裁判にかけたかったようだが、当時の戦勝国である中華民国の蒋介石総統が「安岡先生は戦犯ではない。見識の高い立派な人物だ」として断固として反対したために、戦犯にならずにすんだのである。

本当は、「全ての戦争には光と影がある」ように、先の大戦（大東亜戦争）について言えば、日本の言い分や行動にも正しい部分と間違った部分と2者があったはずなのだが、GHQは自由と人権の尊重を説く一方で、歴史認識については、ひたすら影だけを強調し「日本が悪かった」という力の論理で占領政策を押しきった。インドネシアなど東南アジアの国々を独立に導いた光の部分は「大東亜戦争の肯定論は認められない」という理由で退けられ、かつ、憲法草案では言論、報道の自由を掲げながら、東京裁判批判も、原爆投下や都市の無差別爆撃の非人道性を問うことは「当裁判所の管轄外」として除外され、大東亜戦争の正当性を抗弁し主張する報道もGHQの指令で検閲されて禁止された。しかし、安岡先生を戦犯にすることは中華民国の反対で手をつけられなかったのである。それだけ戦前から親交があった蒋介石総統は、安岡先生の見識を高く評価していた。その見識は、日本の更なる躍進のために活用されねばならないほど価値があったが故に、その人格識見をアジアのためにも惜しまれたのである。

では、先生は、いかなる教えを人々に、あるいは為政者に解いていたのか。それは、前述したように、一にも二にも「歴史と古典に学ぶ重要性」だった。あるいは「道徳、あるいは倫理、または徳育の重要性だった」。

具体的に見ていくと、例えば、「歴史」についての言及だが—

「終わりを慎み遠きを追えば、民の徳厚に帰す」（孔子『論語』）

「将来に関する予言者の最善なるものは過去である」（英詩人・バイロン）

「歴史は例証からなる哲学だ」（ギリシャの歴史家、デオニュシオス・ハルカリナッセウス）

と賢人の言葉を借りて先生は、歴史に学ぶ価値の高さを強調されている。著書の『人間学のすすめ』（福村出版）の中では「人間は墮落すると必ず刹那的になるが、本気になって自覚ができてくると、必ず現在の時点において過去を回復し、未来を考えるようになる。現在は無限の過去の蓄積によって得るもので、これに根ざさなければ未来はない。現在は過去の終わりであるとともに、未来の始まりである。したがって現在に於いて過去を回復すれば、すなわち終わりを慎んでその遠きを追うと、必ず将来の世界を創造する力が生まれてくる。これがいわゆる徳が篤くなるということである。」と記し、過去に学ぶこと、つまり歴史に学ぶことがどんなに大事かを力説されている。これが第一の教えである。著書『人づくりの原点』の中でも「歴史を例証し、だんだんと点検していくと、自然に先が見えるようになる」と叙述している。

◆古典は文化・思想・学術の根幹。そこを捨て去った戦後日本

先生の『孟子』（PHP文庫）では、「古典」を学ぶ重要性について「古典は

文化の根幹であり、新しい思想学術はつねにこの根幹から生ずる花であり、実であり、枝葉である。古典の教養を顧みないモダーニズムは要するに軽薄と過誤とを免れない。」と指摘されている。

戦後、いかに日本国民が古典から遠ざかってしまったか。終戦直後から『古事記』が授業から遠ざけられて久しい時間が過ぎてしまった。欧米の学生は、欧米文化や哲学の原点である神話の『ギリシャ神話』や『聖書』を必ず学んで成長する。そのために、古典が読めるよう高校時代などにギリシャ語やラテン語を学生に学ばせるほどだ。何故なら、古典の多くがラテン語などで書かれているからだ。日本の学生は『古事記』を学んで成長する学生がどれだけいるだろうか。教えられる先生もいない。学生諸君にも、先生方にも是非、古典に学ぶ重要性を知ってもらいたいが、中学、高校、大学を通じて日本や中国の古典に接する機会も時間もほとんどないのが現実である。

例えば、現代の大半の学生は、『古事記』はもちろん、江戸時代に山鹿素行が書いた『古事記』の優れた解説書である『中朝事実』の存在も知らず、読んだこともないだろう。戦前までは、山鹿素行先生の存在は誰もが知り『中朝事実』はよく読まれていたが、現代においては、「忠臣蔵」は知っていても、素行先生の存在は、若い人にはほとんど知られていないのが現状である。

江戸時代前期の軍学者で古文辞学派の山鹿素行が『古事記』について書いた解説書『中朝事実』は立派な日本文化論、日本人論を成す名著だ。当時、江戸時代の儒学者、漢学者、武士の多くが、「日本より中国が優れている」と仰ぎ見て自己を卑下していた。そうした世相を憂えて「日本こそ、こうした点で中国より優れている。日本こそ中国（世界の王道をゆく国）なのだ」と『古事記』を読み解いて書き、人々を覚醒させた」ことで有名な本である。また『古事記』が描いた国生みの世界が、いかに面白くまた、話し合いを尊重したエピソードに満ちているか、すなわち今日で言う民主主義的な要素に満ちているかは驚くべきことである。日露戦争を指揮した乃木希典将軍が昭和天皇の幼少時に、一読を薦め献呈した理由がよくわかるのである。

しかし、それほどの名著も敗戦でGHQの焚書にあい、街の本屋から消えた。山鹿素行も戦前の評価から、一転して避けられるほど急変したが、何故か岩波書店の『山鹿素行全集』は焚書に遭わずに済み、『中朝事実』は10年ほど前から現代語版がでて、ようやく復活したのである。

◆道徳、徳性を重視した徳川家康の教育政策

安岡先生は為政者のあり方を通して道徳という価値の重要性についてもしばしば言及しているが、代表的著書の『東洋思想と人物』（明德出版社）では、中国の春秋戦国時代の思想家・墨子の口を借りて、政治家の任務について次のように語っている。「師と大臣を択ぶこと天下の大事なり」と徳川政権初期の名将・本多佐渡守正信の言葉を借りて政治の要諦も述べている。それが同時に人間についての考察になっている。

「人間の心には常に二つの魂の戦いがある。光と暗と、善と悪と、自利と利他と、愛と憎と、この戦いは常に理想の燈火を逐う人間の歩みをしどろもどろにする。しかし偶々宗教的信仰の固い人、道徳の前にある尊い単純生を持った

人は、何の拘泥もなく驀直（まっしぐら）に光を逐（お）って進み得るものである。墨子はかくのごとき人であった。……随って彼はすべての人にこの尊い道徳的単純生を認めた。ただすべての人が驀直に進むべき大道を知ることは難い。それを示すはすなわち為政者の任務である。為政者の制定する法令はこの理想の燈火の高揚であり、大道の指示であり、躊躇巡礼の叱咤鞭撻である。」

と「道徳」を追求することがなぜ大事かと言及をしている。「道徳の前にある尊い単純生を持った人は、何の拘泥もなく驀直（まっしぐら）に光を逐（お）って進み得るものである」とは、実に含蓄の深い言葉である。戦後教育が、この「道と徳」という東洋三千年来の教えをいかに無視してきたか。その結果が、今日の世相に現れていると言えはしないだろうか。

「その役目をよく果たしたのが徳川家康だ」と、歴史を渉猟した安岡先生は指摘している。すなわち明治の偉大さを導いたものは、「徳川家康公に始まる徳性重視の儒教教育にある」と唱えている。江戸時代の素晴らしさは、最近でこそ説かれているが、安岡先生は、はるか以前から指摘していた。すなわち、「明治維新の偉大なものは総て徳川時代の経験と陶冶に連なっており、その封建社会道徳も、明治維新の人々がその精神力を掬（く）みあげた活泉であったことは言うまでもない」（『東洋的学風』全国師友協会刊）と明快だ。



狩野探幽が描いた徳川家康像。(大阪城天守閣蔵)

◆衆人を導いて道徳文明に高めてゆくのが政治の使命

徳川治世の根幹を成した儒教の教えだが、儒教については、何故それが大事なのかについても懇切丁寧に説いている。先生は「二世紀半を超える江戸時代を通じて、その思想・学問・政治・文化に最も大いなる影響を与えたものは儒教である。最も現実に即した倫理及び政治に関する教えであり、人間の倫理を、根本的に君と臣・親と子・夫と婦・長と幼・朋友相互・の五種の関係に分類し、この倫理を通じて道徳が実践せられる処に文明が発達する。倫理道徳の頹廢の上には何事をも建設することはできない。国家の最も明確な相違は、人材（エリート）の差に外ならない。人材は徳を體（からだ、たい）とし、才を用とす

る。才徳双全は聖人、才徳兼亡は愚人、徳・才より勝るは君子、才・徳より勝るは小人と言う。いかにして聖人・君子則ち人材を養うかが教学であり、その人材を知り、これを用い、之に任すのが政治である。治者に人材無く、治者が時代人心の要望に応ずる能力を失い、職責を怠り、享楽に耽溺し、賢者を忌避し、私党を結んで相争うようになれば、必ず国家は衰亡を招く。衆人を導いて道徳文明に高めてゆくのが政治の使命だ」と語っている。

現代において「衆人を導いて道徳文明に高めてゆくのが政治の使命だ」と自覚されている政治家、リーダーが果たして何人いるだろうか。

安岡先生のこの「倫理を通じて道徳が実践せられる処に文明が発達する。倫理道徳の頽廢の上には何事をも建設することはできない」という言葉は、現代人が深く味わう言葉である。その最も重要な根幹たる道徳教育が軽んじられて戦後 70 年余が経過した姿が、今日の日本である。戦前の日本や戦後間もない頃には無かった忌まわしい事件の数々は、最近では、教師による教師へのいじめ事件が有名だが、あまりにも愚かで挙げたらきりが無いので、敢えて言及はしない。

◆講義学問の自由を押し広めた徳川家康と藤原惺窩

徳川家康は、豊臣秀吉が兵を海外に派遣した文禄年間（1593～96年）に、一代の儒学者・藤原惺窩（ふじわら せいこ）を江戸に招いて『貞観政要』を聴講し、門弟の林羅山が家康に仕えた。1630年（寛永7年）、徳川家康は林羅山に上野忍岡の家屋敷を与え、羅山は、同地に私塾で儒学を教え孔子廟を設けて祭祀を行った。塾の維持運営はその後、代々の林家当主（大学頭）が継承したが、1690年（元禄3年）、将軍徳川綱吉が神田湯島、今の JR 御茶ノ水駅近くに孔子廟を移築し、講堂・学寮を整備した。その際、孔子の生地である山東省曲阜の「昌平郷」にちなんで「昌平坂学問所」と命名され、全国から好学の士が参集し、幾多の人材を輩出した。また、ここで学んだ人々は自藩に帰り、学問の師となったり私塾を開き、経世済民を説き、人材の養成を旨とした学問を広めた。

こうして職業儒家が独占していた儒者の講説を家康が公開したことは、儒教発達のために特筆すべきことだ、と先生は解説している。「家康は講学の自由を宣言した。家康は儒教にこだわらず、儒教も仏教も自由に採用した。学派もこだわらず、専ら経世済民の道が主眼だった。「講義学問の自由を押し広めたのは、徳川家康と藤原惺窩と言われている。」と安岡先生は、家康や藤原惺窩の業績を高く評価している。

この家康の「講義学問の自由」の種が生きて花開くのは徳川時代後期を待たねばならない。それは次回にお伝えする。